中国四川地震、5年前と同じ活断層で

日本郷友連盟副会長兼総合研究所長　　倉　田　英　世

はじめに

中国四川省で、4月20日（日本時間9時過ぎ）にマグニチユード（M）：7クラスの地震が起こった。今回の地震は幸か不幸か、5年前の2008年のマグニチユード、M8．0と同じ活断層上で起こっているという。四川盆地の西側には、全長500キロに及ぶ活断層「龍門山断層帯」が伸びている（ＭＳＮ山系ニュース）。今回の震源地は、５年前のものから約１００ｋｍ南の廬山と雅安の近くである。

今回の発生メカニズムは、'08 年と同じ断層で起こったと考えられる。今後もＭ－６程度の余震が起こる可能性がある（東大：加藤教授）という発言もあり、5 年前の余震とも見られている。李克強首相は、即 20 日の午後 1 時過ぎに北京を発ち、専用機とヘリコプターを乗り継いで、約3時間後に現地に着いた。それまでの間、機上で被災地の地図を広げて、軍部の報告を聞く様子が放映され、「我々には経験がある。被害・非難に打ち勝て」と指示したと云われている。

被害は、発生日の夜の段階で、死者150人、1週間過ぎて200人超に、怪我人は夜の段階で少なくとも5，800人、家を失った人は夜の段階では多数とされていたが、約30万人と数が具体化されが大きな地震であった。地域の古老によると5年前の地震より大きかったとのこと。ここで明らかにしておきたいのが、四川省地質鉱物資源局の范暁氏は、大断層上に作られている「三峡ダム」が引き金となった5年前の余震という説を唱えていることである。

１．震源地で大コンクリート塊噴出：―地下核施設の爆発か―

震源地の山の、地下から「第１図：噴出したとされるコンクリート塊」に示すようなコンクリートの大きな破片が多数噴出した。

第１図　噴出したとされるコンクリート塊

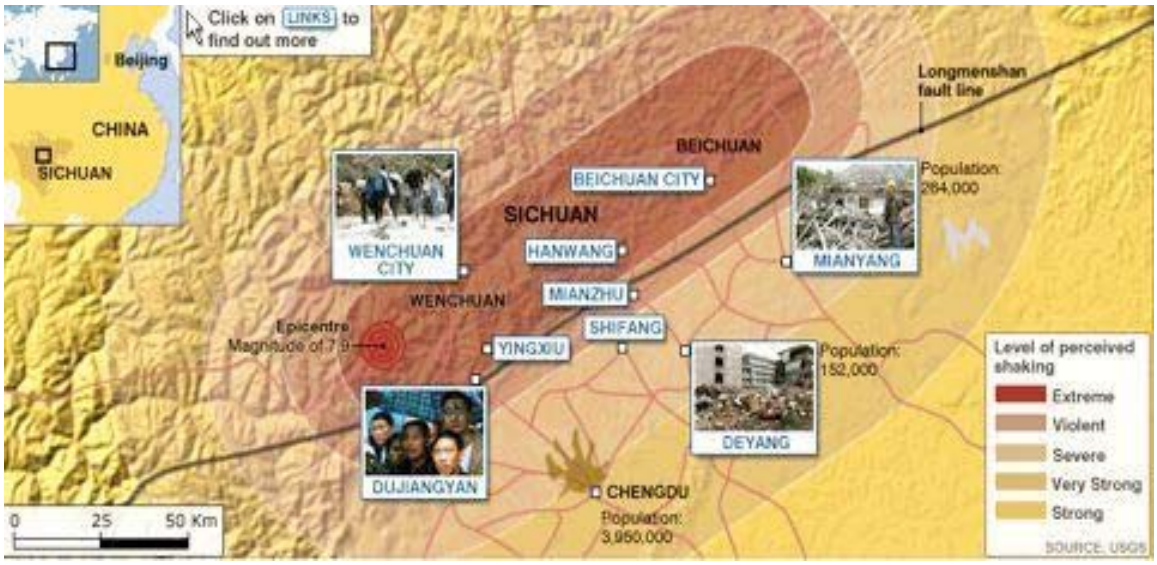
註：車との関係からその大きさ及び噴出規模の想像を。

専門家は地下核施設爆発によるコンクリート塊の可能性を示唆している。現場は田舎の寒村故に、コンクリート建物群はほとんどない。ましてやコンクリート製の地下構築物などはあり得ない。そのためコンクリート塊の出所が問題となった。そして周囲の山の山腹付近に穴が開き、そこからコンクリート塊が休憩時に食べるソフトクリームか、練り歯磨きがしぼり出される時のようにねじれた流れとして流出し、次第に分裂して塊になったという所見の通りであったと考える。

＊被害範囲と被災者の救出作戦

現地の村民達は、5 月 12 日の地震発生時、畑で農作業に従事していた。その時突然大振動が起こり、付近の山の中腹に穴が開き、そこから練り歯磨きをしぼり出すように、コンクリートの破片が噴出した。その状態は約 3 分続いたという。

第2図：四川省の地下核施設爆発と放射能汚染(2008/06/04) の記事画像



註：震源位置と広大な汚染地域の規模が把握できれば幸いである。

ここで 5 年前の「第 2 図：四川省大地震における地下爆発と放射能汚染」の状況を今回の状況を考える参考として示しておく。震源地付近の映秀鎮と旋口鎮の境目にある山の上り坂に、地震後の調べで幅約一キロ、長さ約 2 キロの巨大な溝ができた。深い溝の底には、「第 1 図」に示したような直径 20ｃｍから 50ｃｍを超える大きなコンクリート破片が噴出した。付近の建造物からは想像できないことから、地下に噂通り大規模な核兵器関連の建造物が存在し、それが爆発したのであろうと想像されているが当然である。

今回の地震による被害の規模は、5 年前と同じかそれ以下であったが、先に出てきた古

老の言よれば振動は激しかったという情報もある。これは地震よる長期的な震動よりも、核爆発による瞬間的な振動が激しかったためである。そのため中国当局は、前回の被害に比して、今回は核施設の爆発による被害が大きかったので、核施設の実態を公表しないために、諸外国からの支援の申し出を受け入れなかったと見られている。

２．前回の地震との被害状況の比較

しかも、新中国新聞社が報道した噴出の時間と噴出現象に基づくならば、先ず地下の火山爆発の可能性は排除できる。明らかに地下核施設の爆発だったといえる。今回支援を受け入れないのは、如何に機密度の高い状況下に置かれたかを知ることが出来る。

写真が提示されないので想像するしかないが、地下には近代建築物が並び、整然とした通路が走っていると想像される。そこから死者が、防護衣をつけたまま外に運び出されているのである。確かに農夫の皆さんと「**大きく異なる服装の人達**」が、地下の核施設で働いていたのであろう。この時点までに把握出来た被害の状況は、「第 2 図と第 3 図」から想像でき、施設で働いていた人々が、現地の人達と異なることが、例えば「第３図」に見る死者が最新の防護服装を身につけていることから解る。

第３図：死者の状況、特に服装に注意

註：服装から核関連施設で働いていた人達の死骸と見る。

＊．寒村に現れた核施設災害の状況

地震が起こったとき農夫達は畑を耕していたというが、この地域は貧しい寒村にすぎないことから、「第 4 図」の写真に示す建物は、前方の徹底的に破壊されているのは地方特有の寂れた古い建物である。後方に残ったコンクリート建築物は、最近の建築機材をふんだんに使ってがっちり建てられた、核関連施設用の建物であろう。「第５図」に示すよう

に地震前後の現地の空中写真を比較のために並べてみると、地域全般の被害の大きさが解る。被害の大きかった地域は、左図の中央を少し下がった所で、右図と最も異なった様相を呈した地域であることが解ると思う。

「第４図」を見ると現地に寒村では想像できない、地震にもかなり強い高層ビルが建設されていた事を示している。その大部分が破壊され、崩れ落ちているように、古いあばら屋が、近代建築物の周囲に建ち並んでいたことが解る。

第４図：寒村に家屋と近代建築物の被害の差異

註：前方の破壊された家屋と、広報の近代建築物を比較して欲しい。

第５図：被災前（右）と被災後（左）の差から、地震の規模が予想できる。

註：左図中央やや下右の、くねった道路が消えている部分が今回の震源地付近で、その上大きく曲がった道路跡のある部分が 2008 年の地震の震源である徒想像できる。第 2 図と比較して理解いただきたい。

３．今回の四川省地震では核施設が大爆発

5 年前の四川省大地震について、2012 年の報告書が提出されるまで、地震であって核爆発ではなかったという論がくすぶっていたが、地下核爆発だと云うことがデータからはっきりした。そのことは、地下での水爆および熱核爆発時による地表面での反応が始まってから、反応の終わるまでに時間が、2008 年の四川省大地震では 70 秒から 90 秒であったし、今回は持続時間が 80 秒であった。このことから明らかに、両地震ともに核爆発が起こっていたことを示している。地震によるプレート振動では、振動が 80 秒も続くことはない。

さらに地震の震動だけの跡であったなら、2～3 日後現地に行ったとき、未だに火が立ち上っており、土地のくぼみが卵が茹だるほど熱いままであることはないはずだった。2012 年に民間ベースで公表された報告書は、もっと多くの中国人に中国共産党の正体を認識して欲しいから公表したものである、というコメントがついている。

４．核兵器国が懸念する核兵器施設被害

中国は、2008 年の四川省大地震の場合と異なり、関係国の救援を受け入れなかった。ボランティアの活動にまで規制を掛けた。ボランティアはありがたいが、混乱するようなら迷惑だとした。無料配布の救急援助食料を、ボランティアとメディアには有料で食わせているという情報もある。

今回は核に関する事項を秘匿し、単なる大地震だったという事態が強調されてきた。前回よりも震度は小さかったと強調されているのは、地下核施設の爆発の被害を隠蔽しようとした結果だと見留事が出来る。2008 年の地震でも、地下核施設が破壊されたが、施設の破壊規模は今回の方が大きいと想像される。

地震の実態を秘匿するため関係諸国からの救助出動の提案を受け入れなかった頃は明白である。今の中国は、通常兵器はもとより大量破壊兵器の面で中東のシリア、イラン、パキスタン、アフリカのスーダン、エチオピア、アルジェリア等の開発途上国に、援助国さらには同盟国を拡大しようとしている矢先の事故で、通常兵器から核兵器までの兵器を半強制的な売り込身も含め準備態勢を整えつつあった。

その販路拡大外交のうまさは、歴史的な革命の連続勃発に鍛えられた結果であると考える。そのため中国は、2008 年の大震災に続き、今回の大地震災害の被害を秘匿下において、速やかに復旧し、兵器販売外交を続けるため、あらゆる努力をするであろう。

そのため、ロシア、フランス、イギリス等の主要国に核施設破壊の状況を隠し通す間に、何とかアメリカを初めとする核兵器国の核能力に追随できるレベルまで、迅速に被害を回復させようという政策があるから秘匿を徹底しているのであろうと考えられる。

まとめ

隣国の中国で、2008 年と今年に入って四川省で相互に 100ｋｍ位しか離れていない活断層群の中で、マグニチュード 8．0 と 7．0 の巨大地震が発生した。間隔が 5 年間と短いのと、１００ｋｍ程度しか離れていないほぼ同一地域で起こったことから、今（2013）年の地震は 2008 年の余震であろうという説もある。

いずれにしてもこの地域は、中華人民共和国が独立したばかりの時期に、関係が悪化した米・ソからの核攻撃に対処する目的で、毛沢東主導の下に、奥深いこの四川省の山岳地、しかも地下が選ばれて、中国の核兵器の研究・製造・備蓄施設の総べてが、地下に建設された施設群であった。そのため、2008 年の時もそうだったが、特に今回は一段と秘匿に神経を集中させた建設復旧工事がなされたし、今もなされている。四川省の地下は「**中国のロスアラモス**」といわれる核兵器のメッカである。

核 5 大国（Ｐ－５）の一極として、世界に向けたプライドの高揚と、核兵器能力維持を目指した軍事施設であることから、徹底した修復・改善が急がれているであろう。いずれにしても、本格化しつつある兵器の売り先を念頭においた、開発途上国の取り込を目指す戦略を本格的に開始した段階である。しかも圧倒的な威力を示してきた国家経済の発展が、停滞に向かいつつあることが表明化して来たという微妙な時期だけに、今後の中国経済と核兵器を含む兵器産業及び兵器販売外交の動向は厳しく注目して行くべき状況下にある。

2013．6．23